

聖書：マタイ5：9

説教題：平和をつくる者は幸い

日時：2017年9月17日（朝拝）

山上の説教の最初に記されている8つの幸いの内、今日は7つ目の言葉を見て行きます。「平和」と聞いて、私たちは何を思い浮かべるでしょうか。多くの人はず戦争がない状態を思うかもしれません。最近では北朝鮮の問題が世界を揺さぶっています。先週も弾道ミサイルが日本上空を飛び越えて行きました。このようなニュースが流れるたびに世界が緊張します。これから戦争は始まるのか、始まらないのかと。ある人はこのミサイル問題は戦争を目的としたものではないから戦争には至らないと言います。一方である人は戦争は互いにけん制し合っている内にちょっとしたボタンの掛け違いから始まる。それは歴史の戦争が証明していると警告します。数か月前までは、私もJアラートなるものを知りませんでした。特にミサイルの警報音は気味の悪い音だという噂を聞いて、インターネットで試聴した時は確かに不気味な音だと思いました。でもまずこの音が実際に流されるようなことは起きないだろうと思っていました。ところがこのところテレビを通して、日本各地で実際に流されたこの警報音を私たちは映像とともに何度も聞かされています。このような状態は平和とは言えないでしょう。

平和が失われているのは国家間ばかりではありません。私たち一人一人の周りの人々との関係はどうでしょうか。皆と平和の状態にあるのでしょうか。様々な人との付き合いにおいて対立、争い、また戦争状態にあることはないのでしょうか。職場、隣近所、学校、さらには家庭内、夫婦関係において、……。私たちは国家同士の争いを取り上げて色々論じ、第三者的に非難もしますが、そのように述べる私たち自身も自分が関わる小さな世界では周りの人々と小規模な世界戦争を絶えず勃発させています。平和を求める人間である振りをしつつ、現実には戦争を起こしています。そんな私たちが寄り集まった国家同士が、しばしば互いに戦争の関係になるのも、ある意味では至極当然なことと言われなければならないでしょう。

なぜ私たちは「平和をつくる者」であるより、「平和を壊す者」なのでしょう。多くの方は私は平和を望んでいると言います。平和を望まない人などいるだろうかと言います。確かに私たちは平和を望んでいます。しかしより深く心を探って行くと、平和を

願っている自分の心には、実は争いを好む心も同居していることを見出すのではないのでしょうか。戦争がひとたび起きれば多くの犠牲者が出ます。愛する家族や友人を失うかもしれません。普段の生活はことごとく破壊されます。だからそんなことにはならない方が良くと思います。しかしだからと言ってみんなで平和に互いに仲良く暮らすことに満足するかというと、人間はそうはならない。私たちの心には争いを好む心があります。誰かと戦って相手を打ち負かしたい。それによって自分がよりすぐれた人間、より力のある人間であることを示したい。そしてより多くの祝福を得る者になりたい。一言で言えば自己主張、自己中心の心です。それがむくむくと頭をもたげ、しばし保たれていた平和をいとも簡単に破壊するのです。自分の心を振り返ってみてどうでしょうか。平和を求めていると言いつつ、誰かに対する憎しみを持っていることはないでしょうか。世界が平和でありますようにと祈りつつ、自分の近くにいる人への敵対心、競争心が心に満ちていることはないでしょうか。こういう私たちはいくら平和を呼び掛ける運動を行なったり、そのための行進を行なったりしてみても、それだけではうまくいかないのです。私たち一人一人の心から敵対心、あるいは憎しみの心が取り除かれなければ真の平和は実現し得ないのです。

ではどのようにして私たちの心から敵対心が除かれて、平和の状態が確立されて行くことができるのでしょうか。聖書が示していることは、そのためには神と私との平和が確立されなければならないということです。創世記に示されていますように、最初に造られた人間アダムとエバは神との平和の状態にありました。その状態にある時、人間同士の間にもこの上ない平和の関係がありました。しかし最初の間は神の愛を疑い、神との平和の関係を失いました。その結果、人間同士の関係においても平和は失われ、断絶が生まれました。人間の墮落後すぐにアダムはエバを非難しました。「私の骨からの骨、私の肉からの肉」とまで呼んで喜んで迎えた愛するパートナーを「この女」と呼び、見下しました。それ以来、人間の罪は世界に広がり、あらゆる人間関係を壊しています。このように聖書は私たち人間にとって最も大事な根本的な関係は神との関係であると語っています。この神との関係が正しくないと、あらゆることが不安定になります。神を無視して、自分の力で自分の生活を成り立たせようとして、自己中心的な生き方となります。そのためには他者を殺し、他者から奪い取るようなことがあってもやむを得ないと考えます。神との関係に支えられないと人間はこのように暴走してしまうのです。

しかし聖書が示す素晴らしいメッセージは、神との平和を失っている私たちに、神ご自身が平和の祝福を備えてくださったということです。9 節に「平和をつくる者」と出て来ますが、まずこの言葉で考えるべきは神のことでしょう。本来、神には何の落ち度もありませんので、神の側から平和の関係を築くために行動する必要はありませんでした。ところが神はご自身の側から、私たちとの間に平和の関係を回復するために行動してくださいました。神は愛する一人子を世に遣わし、その方の十字架を通して、私たちが神と和解するための道を備えてくださいました。コロサイ書 1 章 19～20 節：「神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、御子のために和解させてくださった」。御子キリストの十字架の犠牲は私の罪の赦しのために神が与えてくださった解決方法であると信じ、キリストにより頼むことを通して、私たちは罪赦され、義と認められて、神との交わりを回復されることができます。そしてこの神との平和を頂く時に、私たちの内にはただならぬ慰めと喜びが流れて来ます。全能の神と、このような平和の関係に回復されたのですから、もう自分には究極的な恐れや不安や悩みはない。この神に受け入れられ、愛され、守られ、永遠のいのちを持つ者とされたことから来る深い喜びと希望と満たしを受け取るに至ります。

この神との平和を頂く時に私たちの他の人への関わり方は大きく変わります。私たちは神に自分の大きな罪を赦され、平和の祝福を頂いた者として、この神に喜ばれる歩みをささげて行こう！と導かれます。その一つの方法は自分に悪を行なった人を赦し、その人との和解を求めることです。以前の私たちは、自分で自分を救わなくては！と駆り立てられていましたので、自分に害を及ぼす者は早くにやっつけなければならない！と追い立てられました。しかし今や神が私を救ってくださいます。そのことを信じる私のすべきことは、神に喜ばれる歩みをささげることです。それは神が私を赦してくださったように、私も自分の敵を赦し、あわれみをかけることです。仕返しをしないというだけでも十分立派なことですが、聖書はさらに「善をもって悪に打ち勝ちなさい」と語っています。もしあなたの敵が飢えていたら食べさせ、渴いていたら飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになると。相手は自分の行ないを恥じて、やがて悔い改めに導かれるかもしれない。こうして敵との和解を求める。これが平和をつくることの一つのあり方でしょう。

また別の方法は、自分に直接関わりがなくても、平和が失われているところに出て行って、その平和確立のために仕えることです。誰かと誰かが対立し、まさに戦争状態にある時。もちろん軽率におせっかいのようなことをすべきではないと思いますが、神に祈る中で、自分が何らかの役割を果たすようにと導かれるかもしれません。しばしばかつての私たちがしやすかったことは、自分が好む一方の側に与して、その対立を一層深いものにしてしまうことです。それによって、和解できたかもしれない両者の関係を益々引き離してしまいます。しかし神の平和を広げるための働きは、双方の意見に良く聞き、両者が和解するための道を探ることです。そのためには同情と忍耐が必要でしょう。このためには誤解されるかもしれません。また感謝されるどころか非難されるかもしれません。しかし犠牲なしに和解の働きができると思っはならないでしょう。神も私たちとの和解のために大きな犠牲を払われました。ですから私たちもその心の用意がなければなりません。

また大切なもう一つの方法は福音を宣べ伝えることでしょう。これまで見て来ましたように世界の平和にとっての希望は、平和の神がくださった平和の福音しかありません。ですからこの福音を広く宣べ伝えること、福音のさらなる前進のために労すること、言葉と行いをもってこれを宣べ伝えること。これによって「平和をつくる」働きを推し進めて行くことができるのです。

このように歩む人の祝福が 9 節後半に書かれています。「その人たちは神の子どもと呼ばれるから。」 親と子どもは良く似るものです。ですからこれは平和をつくる人は神ご自身と非常に良く似ている、神とそっくりだと評価されるということです。神ご自身こそ平和をつくり、これを推進される「平和の神」ですが、その方をまるで鏡に映し出すような者なので、確かにその子どもだと呼ばれるということです。素晴らしい人に似ていると言われるのは光栄なことです。前にも話したことがあります、私は中高生の頃、教会のある婦人にある俳優に似ていると言われたことがあります。それは中井貴一という人です。当時、中高生の頃の私としては少し不服で、もう少し別のの人に似ていると言ってもらいたかったのですが、その婦人は悪い意味で言ったのではなかったの、まあいいかと受け取りました。このことを前に話した時、後である婦人からは「あら～先生。中井貴一に似ていると言われてご不満だなんて、贅沢ですわ～」と言われてしまいました。30 年も前の話です。また神学生の頃、ある教会で担当した中学生の男子から

は、巨人の桑田選手に似ていると言われました。こちらは明らかにおちよくる意味で言われていたので、全く好きではありませんでした。また見た目もそうですが、もし素晴らしい人格者に自分の人格が似ていると言われたらどうでしょうか。たとえばマザーテレサのようだと言われたらどうでしょうか。その愛の実践において、生き方において、彼女を髣髴とさせるような人だと言われたらどうでしょう。非常に光榮に思うでしょう。しかしここでは「神に似ている」ということが言われているのです。その生き方において、平和を造るために一生懸命励み、取り組んだことにおいて、神ご自身を映し出すその子どものようだ！と言われる。この賞賛の言葉を受けるほどの栄誉・誉れは他にないのではないのでしょうか。そしてただそう言われるというだけでなく、そう言われるほどに神と近く歩んで来たことにおいて、その人は本当の幸せを知っている人なのです。その人がそう歩めたのは、それだけ神との深い生きた交わりに生きてきたからに他なりません。

果たして私たちは神に似ている者でしょうか。それとも反対に分裂と争いをもたらすサタンに似ているということはないのでしょうか。今日覚えたいことは、まず第一に神ご自身が「平和をつくる者」であられるということです。その神の恵み深い働きによって私たち自身、真の平和を知る者となりました。心から感謝です。そしてこの救いを受け取った人に、神はご自身と共に、混乱に満ちたこの世の中で、平和の祝福を拡げる使命を与えておられます。私たちは遣わされている家庭、地域、学校、社会において、神の栄光のために神の平和をそこにつくる者になりたい。それは簡単な働きではありませんが、栄誉ある働きです。やがて必ず完成する平和の御国のために神とともに歩むように招かれているのです。私たちは頂いている真の平和をもう一度感謝して、益々この平和が広げられるために自らをささげたいと思います。そしてやがての日に「神に本当に良く似ているその子どもだ！」、そして神ご自身から「あなたは本当に良くやったわたしの子どもだ！」と評されることに至る真に幸いな人の歩みへ進んで行きたいと思います。